島崎藤村『子に送る手紙』における〈内〉と〈外〉

――ジャンル区分の曖昧性に見え隠れするもの――

李　志炯

はじめに

島崎藤村の『子に送る手紙』（大正一三年六月『藤村パンフレット』に所収、以下、『手紙』と略する）は不思議なテキストである。というのは、藤村の作品群のなかでこのテキストほどジャンル区分が曖昧であり、また不公平な評価を受けてきたと思われるものは他に例を見ないからである。しかし、『手紙』をめぐるこうした不思議な状況にこそ、実はこのテキストに内包された問題の中核があると稿者は考える。その点をこれから論じていきたい。

先行研究のなかで『手紙』が照明されることはほとんどなかった。ましてや一つのテキストとして独立した評価を受けることはなおさら皆無であった。こうした評価の欠如を考える際、二つの手がかりがある。その一つは、「童話の系列をひいた震災記」[1]という瀬沼茂樹のことばが示すごとく、このテキストが同時代に書かれた藤村の〈童話〉と同じ文脈、延長線上で読まれたことである。このような評価の根拠となったのは、故郷の長男に宛てた手紙の形式をとっているこのテキストの表現形式が、当時藤村が力を入れていた、子供に向かって〈話しかける〉という藤村の童話の表現形式と類似することである。もう一つの手がかりとしては、『手紙』から約二年後に書かれた『嵐』を予兆する前段階のものとして、その評価が『嵐』のほうに回収されてしまったことが指摘できる。この場合は、関東大震災後の社会状況の記述など、両方のテキストに同じくみられる内容の共通性がこのような位置づけをもたらしたと考えられる。

しかし、こうした評価あるいは認識において最も大きな力として働いていることは、創作物を藤村という作家一人のみに回収させ、結果的に藤村の作品史という一元的な〈縦〉の評価軸からこれらのテキストを裁断しようとする力学の存在である。だが、『手紙』というテキストの成立過程を細かくみていくと、けっしてそうした一元的な視座では捉えきれない多元的な問題性がそこに絡み合っていることがわかる。そのような問題意識から、本稿では、『手紙』というテキストの成立過程を考察するに当たって、そこに〈大震災後〉の同時代的コンテキストという〈横〉の軸と藤村という作家の個人作品史という〈縦〉の

軸がいかに混合、交渉しているのかを明らかにしていきたい。このような分析を土台に、『手紙』というテキストが位置づけられるべき新たな座標を見出すことに本稿の目標を設定したいと思う。

一、散在する不定形のテキスト

『手紙』は、全三章で構成されている。しかし、最初からそのような構成をとっていたわけではない。『藤村全集』に入っている現在の形として『手紙』が成り立ったのは、おそらく『藤村パンフレット』[2]に所収されたときが始めてだろうと思われる。とすると、このテキストはどのような成立過程を経て現在の形に作り上げられてきたのだろうか、まず、その点から見てみたい。

まず、第一章は、『東京朝日新聞』（大正一二年一〇月八日～二二日）に一〇回にわたって断続的に連載された。だが、連載の際の表題は『子に送る手紙』ではなく、「飯倉だより」[3]となっている。「子に送る手紙」は副題として付けられているだけであった。第二章は、震災翌年の大正一三年一月『新潮』に掲載される。そのときは、題名が『子に送る手紙』となっている。第三章は、初出未詳である。この三つの文章が『子に送る手紙』という一つの題目で併せて載せられたのが『藤村パンフレット』において、ということになる。さらに、昭和二年一月に刊行された短篇小説集『嵐』に「嵐」「ある女の生涯」などと一緒に再び所収される。

このような『手紙』の成立過程は、他でもなく、このテキストが必ずしも最初から〈小説〉として断定できる内容のものではなかったことを意味するが、こうした状況は特に『東京朝日新聞』連載の第一章の性格と密接に関連する。というのは、「飯倉だより」と題された第一章の部分は、その題はもちろん、その内容からいっても、〈震災小説〉というよりは〈震災記〉ないし〈震災印象記〉といったルポルタージュ形式に近接しているからである。[4]むろん、震災に取材した震災後の文章、とりわけ文学者たちの文章にそのジャンル分けが困難な内容のものが多いことは事実である。[5]しかし、現在において『手紙』が当然のように〈小説〉として、それもいわゆる〈震災小説〉という枠組みで捉えられている事情を考えれば、とりわけ第一章は、その部分の個別的な分析とともに『手紙』というテキスト全体のレベルからの逆照射、という両方の観点に分けて考察し、最終的にそれらの考察結果を考え合わせる必要があると思われる。また、そのために欠かせない分析は、テキストの初出と所収本における異同関係の確認および分析であろう。

それでは、初出と所収本との異同関係の分析をとおしてテキストの成立過程を見ていこう。まず、第一章で注目されるのは、初出本の最後の部分、すなわち新聞連載の一〇回目にあたるところが所収本では相当に脱落している点である。その抜けた内容のなかには『新潮』掲載の第二章の初出に再度挿入され、所収本においても第二章に入ることで結果的に活かされる内容の部分もあるが、そのまま『手紙』というテキスト全体から完全に抜けてしまった次のような部分も存在する。

現代人の誇りとする科学がこれほど発達した時代に生れ合せて、一切の自然を征服し切つたつもりで居た私達はその増長した考へ方を根から覆へされた。

ここでは、震災が人々に与えた影響が端的に述べられている。では、「科学」を信奉した現代人の意識の「増長」に対する批判としてまとめられるこの部分の内容が、なぜ所収本では漏れてしまったのだろうか。理由の一つとして考えられることは、この部分が、文明批判的な結論として文章全体のおわりに位置していた新聞連載の際とは違って、所収本では単に第一章のおわりにすぎなくなることで浮き上がってしまったという点であろう。つまり、筆者の震災見聞の結論として、文章全体を締めくくるような内容であるため、所収本では構成上この部分を削除するしかなかったということである。しかし、削除の理由は単にそれ一つなのだろうか。この部分に窺える震災認識そのものが後に修正された点も削除の原因として働いているのではなかろうかという疑問も抱かれるが、その点については判断を一端保留し、ひとまず論を進めていきたい。

第二章は、初出の『新潮』掲載のときから明らかに小説の形式をとっている。それは、このときになって始めて題目が「子に送る手紙」という現在の形で定着したことからも窺えるが、その他にも、この文章が〈創作欄〉に位置している雑誌の目次構成をとおしても確認することができる。なお、初出の際における第二章はそれだけで独立した小説として読まれるように成り立っていることに注意したい。どこにも新聞連載の第一章の引き続きであることをことわる記述が見あたらず、その代わりに「私はお前に宛てゝ書かうと思つて居たこの手紙を送らう」とあるように、前編の引き続きであるならば当然加えるべきではない記述が改めて入っているからである。当然、所収本では、この記述が抜けている。

その他にも、新聞連載の内容と重なる記述は散見される。その点からも初出の際、第二章の部分が独立した一つの小説として位置づけられていたことがみてとれるが、興味深い点は、第一章と第二章とで重なっていた諸部分が所収本ではそれぞれ別の章で活かされていることである。つまり、ある部分は第一章のみに入っており、ある部分は第二章のみに残されているのである。さらに、第二章の初出のときにだけ記述され、所収本では完全に消された部分も見受けられる。所収本におけるこのような文章の再配置は当然テキスト全体の構成の問題と深く関わっており、必然的にテキストの新たな解釈の可能性を生み出すことにつながるが、その点については後に詳述する。

ところで、ここで特記すべきことがある。それは、藤村が『手紙』の第一章を「飯倉だより」と題して『東京朝日新聞』に連載する前に発表した、ある文章についてである。その文章とは、『カメラ』[6]（アルス、大正一二年一〇月）に載せられた「楠雄に」という記事である。大震災について書いたその文章は九月二一日に書かれたとされる。つまり、大震災を語った藤村の文章のなかで最も早い時期のものがこの「楠雄に」ということになる。問題は、この文章が『手紙』の〈ネタ本〉の性格

を有しているという点である。「楠雄に」という題から窺えるように、この文章は『手紙』と同じく読み手として自分の子供を想定した形をとっている。そして、震災にまつわる自分の体験や感想を記したその内容は随所で『手紙』と重なっているのである。そのなかには第一章の内容と重なるところもあれば、第二章に重なる記述もある。また、初出においては、その両方に入っている部分もある。

「楠雄に」を『手紙』の〈ネタ本〉と呼んだのはそのような意味においてであるが、だからといって、それがただちに藤村が「楠雄に」を書く時点で既に『手紙』の構想を立てていたことを意味するものにはならない。肝心なことは、「楠雄に」の内容がどのように『手紙』の各章にそれぞれ振り分けられていったのか、そしてそのような〈ネタ本〉の解体や再配置が何を意味し、どのような解釈を可能にするのかという点であろう。次節では、第一章の分析を中心にその問題について考察していきたい。

二、〈朝鮮人〉といわずに〈朝鮮人〉を語る
――そのルポルタージュ的性格――

第一章は「大震災のあつた日から最早三十三日目になる」（一九九頁）という、震災からの時間的距離を明記した一文から始まる。その導入部に続く下りは次のようである。

私はこの驚くべき震災と火災と、その後の出来事に就いて、狭い範囲ながら自分の見聞したことをお前に宛てゝ書かうと思ひ立つた。（一九九頁）

この引用部分からまず確認されることは、「お前に宛てゝ書かうと思ひ立つた」ということばでみてとれるように、この小説がその題目通り手紙の形式を借りていることである。いうまでもなく、「私」は子供に送る手紙を書く父であり、「お前」とは手紙の受取人として想定されている長男である。父の「私」は田舎で農耕生活を送っている「お前」と呼ばれる長男に向けてひとまず家族の無事を伝えている。〈安否確認〉とは東京と地方に離れている親子の間で震災後、最優先に交わされるような内容であり、その意味で手紙の形式をとったこの文章は表面的には典型的な〈家族〉の話である。

だが、その後に続くのが引用の部分である。ここで「私」は大震災に遭遇して「自分の見聞したこと」を伝えたいという意思を子供に語っているが、「私」の伝えたい項目は「震災」「火災」「その後の出来事」のように明確に三つの事柄に分けられていることがわかる。つまり、大震災について語ろうとする「私」の認識の枠組みがここに窺える。いいかえれば、これから語ろうとする〈震災記〉の〈布石〉ともいえる記述がここでなされているのである。

こうした〈布石〉の記述の後にはある意味深重な目撃談が紹介される。それは「私」が偶然見かけた「百人ばかりの一行」についての記述である。「日頃見かけない人達」だとされるその一行の正体は、「背の高い体格、尖つた頬骨、面長な顔立、

特色のある眼付」（二〇〇頁）と語られた彼らに対する身体描写などから推定すると、〈朝鮮人〉であることがわかる。しかし、ここで注目したいのは、その一行が〈朝鮮人〉を指していることの確認ではない。むしろ、この記述から窺える、〈朝鮮人〉をめぐる同時代の出来事に対する「私」のスタンスないし距離の置き方を重視したい。その際、注目に値するのは、「三十日程前には実に恐ろしい幽霊として市民の眼に映つたのだ」と、「私」が〈朝鮮人〉について述べている一文である。「私」が語り手であるこの一文において、〈我々〉ではなく、あえて「市民」ということばが使われている点に着眼したい。というのは、〈我々〉という複数人称代名詞ではなく「市民」という普通名詞を用いることによって、語り手の「私」は、その「市民」のなかに自分自身を帰属させるのではなく、そこから一歩距離をおいて物事を相対化するように語っているからである。

このような距離の置き方は、それを作家藤村と直結して考えるべきかどうかは別問題として、震災後の一連の出来事に対する「私」のまなざしとそれが向かうところを考える上に一つの端緒を提供してくれるものと思われる。つまり、このような記述が『手紙』の第一章の最初の段落（新聞連載の一回目の掲載部分）になされていることからは、このテキスト、特に第一章の方向性が予兆されていると考えられる。なぜならば、この朝鮮人に関する記述に続いて、「私はこの次の便りから震災当時のことをお前に書いて送らうと思ふ」（二〇〇頁）という本格的な震災記への抱負が述べられているからである。

それ以後に述べられる内容は、急激に襲ってきた大地震や「百七十回」（二〇四頁）を超える余震による人々の恐怖、そして混乱した震災後の周りの状況である。建物は悉く倒壊し、水道は止まり、掘り井戸の水も濁ってくる。そのなか、地震は火災という新たな災害に発展し、「火炎」は「旋風」を巻き起こし、雲か煙かも分別し難い「大きな層雲」が「遠い市街を掴むかのやうに」（二〇四頁）起こってくる。「私」の眼から見た震災直後の町の様子が克明にこのように語られていく。

では、歴史上希有の大震災に直面した人々の内面の様子は『手紙』でいかに表されているのか。「私」が捉える人々の〈心〉の表れは、まず、「隣人」（二〇六頁）の再発見にある。災難に会った人々が互いに助け合う光景を眼の前にすることで、「私」は「隣人」の存在にあらためて気付く。だが、震災に翻弄された人々の〈心〉は、不幸にも、暖かく明るい方向にのみ向かってはいない。

> お伽話でもない限りは信じられないやうな、二千人もの敵が襲つて来るといふ風聞はその翌日になつても続いた。（中略）それにつけても私は曾て仏蘭西（フランス）の旅にあつて、世界の大戦に際会した当時のことを思ひ出す。アウストリア対セルビアの宣戦が布告された当時、巴里（パリ）の都はどんな混乱に陥つたことか。
>
> 『エスピオン、エスピオン……』
>
> （中略）『エスピオン』とは探偵のことで、当時の仏蘭西人にはせたら『独逸の犬』といふ意味にも当らう。あの頃の熱狂した仏蘭西人は仏蘭西人を疑つたが、こんどの大震

災で東京の真中には『エスピオン』のかはりに、哀しむべき『幽霊』が飛出した。　（二一〇～二一一頁）

震災後の混沌した状況のなか、放火や井戸への毒薬入れなどの「風聞」が人々の間で広がる。そうした得体の知れない噂の流布は「眼にも見えない恐ろしい敵の来襲」（二〇九頁）として震災におののいている人々の不安な心をさらなる恐怖へと加速させる。「私」が目撃したことはそのような震災後の社会情勢の現実である。この引用で「私」は、その現実を自分が体験した第一次世界大戦の際のパリの記憶に照らし合わせている。具体的には、「独逸の犬」という意味で「エスピオン」と呼ばれた、フランス人でありながらドイツのスパイとして暗躍するいかがわしい人達がいると思い込んだパリ市民の恐怖心理が、震災後東京における「幽霊」に重ね合わせられている。その恐怖の幻影は、いうまでもなく「眼にも見えない恐ろしい敵」の同義語として使われている。

「私」に言わせれば、「幽霊」は、「流言」に刺激された人々の心のなかで幻想され、それが増幅して「敵でもないものが真実の敵となつて顕れて来る」といった恐怖心理の所産であり、その意味で、それは実在するものではなく「自分等のうちから飛出す幽霊」であるという。「みんな、どうてんしてしまつたのだ」（二一一頁）という一文はそのような「私」の震災認識を象徴的に語っている。「私」の醒めた眼は得体の知れない恐怖に怯えた人間の心が惹き起こす不条理な出来事を見のがさない。低い声と不明瞭な答えのため「怪しい敵」（二一四頁）と誤られ、「市民」に殺されたある日本人青年の逸話の紹介も、そのような醒めた眼の存在に牽引されたものであろう。

ここにおいて、震災後に起こった不条理な出来事に対する「私」の認識が明らかにみてとれる。なぜならば、「幽霊」や「怪しい敵」といった抽象的なことばを使いその対象について明言こそ避けているものの、ここで述べられている内容は明らかに〈朝鮮人虐殺事件〉や〈大杉栄虐殺事件〉など震災後の一連の出来事と結びつけられていると思われるからである。ここで始めて「震災」「火災」と並んで、「その後の出来事」が、大震災を語る枠組みのひとつとして別個に設けられていることの意味がわかってくる。

震災後の一連の不条理な出来事が、震災後の集団的恐怖心理のなかで流布された流言飛語に安易に便乗した自警団らの人々の狂暴なる行動の結果、朝鮮人や社会主義者などがその犠牲になった事件であることは本稿で改めて述べる必要もないだろう。その意味で、『手紙』における震災認識は震災後の出来事に向ける厳然たる批判のメッセージといえる。ところで、瀬沼茂樹は「当時、戒厳令がしかれて言論の自由をもたなかったとはいえ、朝鮮人問題について本質的考察の意図をもっていなかったとみてよい」[7]といい、『手紙』における〈朝鮮人〉記述についてそれほどの評価を与えていない。確かに瀬沼が述べたように、藤村が〈朝鮮人〉問題を「自己の問題として深く追求するところ」はなかったかもしれない。その意味で『手紙』の〈朝鮮人〉記述を「婉曲な批評」として位置づけた瀬沼の評価が完全に間違っているとはいえないだろう。

しかし、現在の時点ではなく同時代のコンテキストのなかでこの問題を考え直すならば、その〈婉曲さ〉こそが実は重要視すべき点である。というのは、『手紙』の第一章が震災から一ヶ月後という早い時点で〈新聞連載物〉として公に発表された文章である点、とりわけ文学者のなかで〈朝鮮人問題〉について小説や記事の形で批判的に語った人がほんの僅かに過ぎなかった点などを考慮すると、震災直後の〈戒厳令〉と〈言論統制〉の問題は瀬沼が述べている以上に厳しい問題だったからである。[8] そうした同時代の困難な報道状況については「かういふ時に新聞でもあつて、正確な報道を伝へて呉れたらば、とつく〳〵さう思つた。」（二一一頁）という一文でも表れているように、「正確な報道」がなされるまでには相当の時間が必要とされたのだ。つまり、リアルタイムで敢えて発言をするとすれば〈婉曲〉な表現を取らざるを得なかったのであり、その意味でむしろ肝心なことは、朝鮮人虐殺といった不条理な出来事をどのように表現するかの問題にあったといえる。

したがって、『手紙』の〈朝鮮人〉記述の問題もそうした角度から接近すべきだと思われる。そうすると、問題を正面から踏み込んで批判することはできなくても、そのような出来事が生じた根元的な理由として、異常な状況におかれた人間の心の闇の突出を指摘しているところに、このテキストの同時代文章としての意義を見つけることができるだろう。震災が与えた莫大な人的、物的被害を平面的に並べる次元を越え、混沌のなかで迷走する人々の心の発現としての出来事を冷徹に見つめているところに『手紙』、とりわけ第一章の部分の意味がある。

〈手紙〉という手法を取り入れることによって、想定された相手に向かって語る形で自分が伝えたい情報を比較的自由に発信できる枠組みが確保される。その結果、克明な震災ルポルタージュの記述が可能になる。その意図の可否はいずれにしろ、まだ戒厳令が解かれずにいた時勢のなか、記述の表層に〈手紙〉の手法を借りた〈親子物語〉を仮設し、その裏面で震災に取材した内容を語るという記述の構造が大地震によってもたらされた様々な出来事の深部を語るのに有効であったことは確かにいえる。ところで、第二章になると、『手紙』は、第一章のときとは明らかに異質なテキストへと変貌する。その変貌の様子と意味については次節で見ていきたい。

三、〈家族〉という名の共同体――浮上する父と子の物語――

第一章が震災後の社会の動向を捉えた〈震災ルポルタージュ〉とも呼べる性格の文章であるならば、第二章からはどうだろうか。第一章と第二章は二ヶ月ほどの時間的間隔をおいてそれぞれ別の発表媒体、すなわち新聞と雑誌に掲載された経緯もあってか、両方は独立したそれぞれの文章として読めるような体裁になっている。いいかえれば、ひとまずその記述内容が重なってはいない。たとえば、第一章が、九月一日に襲ってきた地震から「三十三日目」とその書き始める時点が記されて「九月の四五日迄あたりのこと」を述べたとされていることに対し、第二章は書き始める時点が震災から「六十七日目」とされ「九月四日」の話から始められている。また、「今こそ地震当時のこ

とを振返つて見るに好い時だ」（二一六頁）と震災について始めて書くとも述べているような記述が第二章で改めてなされていることも見逃せない。

第二章は、「私」の知り合い「吉村さん」と彼の家族の逸話を軸に震災話が展開される。その吉村さんは、震災で家を失い家族全部が苦しい避難生活を余儀なくされているにもかかわらず、「この震災に喪心した様子などは更になく、動作や表情は生々として居て、むしろ快活なくらゐであつた」（二一七頁）と語られる。食糧難、水不足など数々の苦難にも一家の家長、吉村さんは動ずることなく家族を見守る。このように、災難に遭った際の〈家族愛〉の典型として吉村一家の話が語られていく。ここで注目したいことは、吉村一家のなかで〈父〉の吉村さんひとりが顕著に焦点化されている点である。母不在の「私」の一家とは異なって母健在の吉村家であるが、その母が語られることはほとんどない。その代わり、「子煩悩」（二一八頁）の吉村さんが子供達を見守るという父子のふれ合いの場面が語りのほとんどを占めている。このような設定、つまり母親ではなく〈父親〉がこれほど前景化される構図は、家族をめぐる震災話としては非常に珍しい。というのは、エッセー、小説などを含め震災に取材した文章群において〈家族〉が語られる場合、主に強調されるのは、子供のためには自らの犠牲をも惜しまない母親の〈母性愛〉だったからである。[9]

『父さん、十番の方へでも行つて御覧。ゆうべなぞは皆、竹槍を持つて居て、一町毎にさういふ人達が待ち構へて居て、行先を言はないものは町を通さなかつたさうだ。今夜は今井さんの小父さんなども本物の槍を持出すさうだよ。

（中略）』

こんな話を私の側へ持つて来るのはお前の弟だ。どんな事柄でも、それを次郎や三郎の口から聞く時は半分お伽話で、それほど殺伐な気を起させなかつた。

（二二〇頁）（傍線は引用者、以下同様）

「竹槍」を持って通行人を検問するということからみて、ここに述べられている「さういふ人達」とは自警団であることがわかる。まさしく震災後の物恐ろしい雰囲気を体感させるような一文であるが、注目したいのは、その話を子供から聞いた父の「私」の反応である。子供から聞かされたその話が実は「殺伐」な内容であることを「私」は充分承知している。それは、その「殺伐」な話を指して「どんな事柄でも」と言い表していることからも推察される。また、自警団らしき人々が関わった出来事そのものを批判的に語った第一章の内容から考慮してもそのようにいえる。しかし、この引用で「私」は、そうした話でも話の伝達者が子供であると、「半分お伽話」のようで「殺伐な気」が起こらないと語っているのである。当然、ここで可能な判断は、同じ事象に対する「私」の考え方の転倒ではあるまい。問題は、同じ事象でもそこに〈子供〉が介在するならば、そうでない場合とは異なる心持ちになると語られている、記述そのものにある。つまり、ここで焦点化されているのは、「殺伐」な自警団ではなく、その話を伝える〈子供達〉と〈父〉自

身であるのだ。

このようにみてくると、第一章とは明らかに異質な第二章の性格が浮かびあがる。同じく震災について語っているにもかかわらず、そこで前景化されているのはそれぞれに異なる。つまり、第一章が震災後の一連の出来事を前景化していることに対し、第二章の場合、震災の渦中に巻き込まれた〈家族〉の話がそれに置き換わる。吉村さん一家の逸話から始まった〈家族〉の話は、結局「私」の〈家族〉へと辿り着く。そして、その〈家族〉の中心に〈父〉と〈子供〉が据えられる。

第一章と第二章におけるこのような構図の変化は、初出から所収本まで『子に送る手紙』のテキスト変遷過程をみてもまた確認される。第一節で既に言及したように、初出の際、第一章と第二章には重なった記述が存在した。その重複が所収本では解消されているが、重複していた部分はそれぞれ二つの章に振り分けられ再配置されている。その内容を詳しく見てみよう。

①そこへ見慣れぬ洋服姿の男が通りかゝつた。（中略）そこに居た人達はいづれも薄気味悪く思つて、しまひにはその男を噂のある恐ろしい敵の一人にしてしまつた。まるで、みんなの疑心から生み出した幽霊だ。[10]

②木曾福島小学校の職員で私の許へ見舞に立ちよつて呉れた年若な教師があつた。その人は翌日にも木曾福島まで帰らうとする矢先で、お前宛に書いた葉書を預かつて行かうと言つて呉れた。[11]

引用した二つの文章は、両方とも所収本に入ることができずに削除された初出本の部分である。引用①は、『新潮』に掲載された第二章部分の初出の一カ所であり、引用②は『東京朝日新聞』に連載された第一章部分の初出の一カ所である。まず、引用①の場合、その内容の「幽霊」「恐ろしい敵」などのことばからわかるように、震災後の一連の出来事について述べている内容である。文章表現こそ多少異なるが、内容そのものは第二節で取り上げた所収本の第一章の内容とほぼ大同小異である。初出においては両方に挿入されていたこの記述は、所収本では、最終的に第二章からは削除され第一章の部分のみが残ったのである。引用②の場合は、田舎に居住する長男宛に家族の無事を伝える葉書を折よく訪ねてくれた故郷の知り合いに預けるという話である。その内容のみならず文章表現においてもほぼ一致するところが第二章の初出にも存在する。そして、結果的に所収本では第二章の部分のみが活かされることになる。

当然、肝心なことは何を尺度にこのような再配置が所収本で行われたのかという点にあるが、以上の考察から次のような推論が可能であろう。つまり、震災やその後の出来事から見聞したルポルタージュ風の内容は第一章に、父と子供らの〈家族〉に関わる内容は第二章にとそれぞれ分けて配置されているということである。このようにして、第一章と第二章の異なる構図は、テキストの成立、変遷過程の考察からもまた確認できた。では、このようなテキストの構図は最後の第三章においていかに結ばれるのだろうか。

全三章のなかで最も直接に〈子供〉に呼びかけ、また子に送

る〈手紙〉という文章全体の枠組みを改めて喚起させるような導入部によって第三章は始まる。「四月」という記述があることから、震災から半年以上経過した時点で書かれたことになっていることが窺える。その内容は、第一章、第二章を含めた全体の内容を圧縮していると同時に、まさしく『子に送る手紙』というテキスト全体の題目に相応しいものとなっている。というのは、一、二章で語られた震災による人々の苦労や一連の出来事が、過ぎ去った長い「冬」（二三二頁）に喩えられた隠喩的な書き方で総括されており、そのような震災見聞と体験の記述が収斂されるのは、他でもなく、父の「私」と〈子供〉だからである。

「病躯」の「私」は自分が「滅び行く江戸の最後の人の一人」（二三三頁）であることを自認しつつも、厳しい「冬」を追い払って到来するだろう「春」を待望する。〈冬〉に〈春〉が対置されるごとく、〈震災〉に〈子供〉が対置されているともいえる構図である。そして、「私」は廃墟の東京からも揺るぎない復興の萌しをみつけるのだが、その心持ちは作品の終局部で次のように語られる。

流れよ、流れよ、とも言ひたい隅田川には、（中略）春の焔にまじつて、もう一度この東京を破壊のどん底から甦らせるやうな、大きな力が、溢れ、流れて来て居た。（二三五頁）

「私」からすれば、東京という都会は「隅田川を離れられない」し、その意味で隅田川は「東京の運命」（二三四頁）である。「震災後の第一の春」を迎えた「私」が子供達を連れて出かける場所もその隅田川である。そのときの「私」の心境は「春を迎へに行くやうな心持ち」と象徴的に言い表されている。つまり、季節の〈春〉に「私」の内面の〈春〉が重ね合わせられているわけである。それも詩的律動をともなっていることに注意すべきだろう。

ここで確認されるのは、まず、変わらない隅田川の流れに託された東京の復興への希望である。冬が去れば必ず春が来るように、東京が「大きな力」で「破壊のどん底」から蘇生することを「私」は信じてやまない。文章の詩的律動が読む側にそれを強く感じさせてくれる。ただし、「私」がその再生を信じ、また願っている対象は、震災に覆われ廃墟化した都会の東京のみではない。再生への「私」の願望は、焼け跡の東京のみならず、病から恢復しつつある病躯の「私」自身、さらには母親不在の状況から立ち直ろうとしている家族としての「私」一家のほうにも重ねて向けられている、と思われる。ここにきてようやく『手紙』というテキストの全体像が見えてくると思うのだが、それは具体的に次のような意味においてである。

母親不在の状況がもう「一五年」に至るという本文中の記述からわかるように、「私」は母無き子供たちを抱えた妻無き父である。したがって、「私」は父親であると同時に母親の役割も代行しなければならない生活を余儀なくされてきたが、こうした一人二役の親としての「私」の内面は次のように語られる。

さう言へばお前達の母さんが亡くなつてから、今年でもう十五年になる。（中略）震災後、この焼跡からはいろ〳〵なものが堀り出された。驚くべく悲しむべき幾多の悲劇が生れた。そこから発散する社会の空気はかなり息苦しいものであつた。おそらくお前が私の年頃にでもなつたら、この私がどんな心持で過ぐる半年ばかりの非常時に際会したか、その息苦しい空気の中で自分の子供を護らねばならなかつたか、それを想像して見て呉れる時もあるだらう。

（二三二頁）

ここでは「独りで」子供達を抱える父としての心境が精細に告白されているが、〈震災〉を境に「私」の親としての心労が一層増幅してきたことが窺える。その心労は、社会の「息苦しい」空気から子供を護ることの困難さに起因するもので、その背景には震災後の「悲しむべき幾多の悲劇」の存在があると語られている。「悲しむべき幾多の悲劇」という表現は抽象的ではあるが、それが、人々の心の不安が惹き起こした一連の出来事や震災によって逆境に立たされた家族の話など、第一章と第二章で述べられてきた内容を総体的に踏まえた表現であることはいうまでもない。社会の「息苦しい」空気から子供を護る、こうした「私」の心持ちの底辺にあるものとは、他でもなく、〈社会〉に対して〈家族〉を対置させるという認識であろう。いいかえれば、〈内〉である〈家族〉から〈外〉の〈社会〉を隔離するという構図である。つまり、ここで〈社会／家族〉は〈外／内〉という、はっきりとした図式が露呈される。

こうした図式の確認をとおして浮き彫りにされるのは、〈家族〉という内側の存在の外部世界に向ける「不安」（二一〇頁）で「心細い」（二一四頁）心境である。そして、そのような心境を語りの底辺に据えることで、外部に対置する〈家族〉という内部世界の確認とその絆の深化に到達していることが、『手紙』というテキストの全体構造といえよう。つまり、〈外／内〉という構造は、空間的レベルではなく、明らかに〈心境〉の審級に属しているのである。

だが、こうした心境の動きをみせる主体は、厳密にいえば、〈家族〉ではなく語り手である「私」個人である。〈外〉に対する警戒と畏怖の感を土台に〈内〉なる〈家族〉を〈外〉から隔絶させる、いや、隔絶させたいと願うのは父の「私」であり、そのような「私」の内面は、

（震災以前に送られた：引用者注）それらの刊行物から私の受取る感じはあだかも遠い『昨日』から受取るもののそれに似て居た。震災以前と、震災以後とでは、こんなにも私達の気分が違ふかと思はれるやうになつた。

（二一五頁）

とも語られる。ここでは、震災前を「遠い『昨日』」と呼ぶことで、震災以前と以後における「気分」の大きな格差が述べられている。注視したいのは、「気分」の変化によって、震災という出来事がここでは〈時間〉的レベルで位置づけられていることである。換言すれば、心理的隔絶感が〈時間〉的レベルを

媒介にして吐露されている。主語として「私達」という一人称複数代名詞が用いられているにもかかわらず、その心理的隔絶感の主体が「私」個人であることには疑問の余地がない。

こうした「私達」という主語の使用は第二章以後に特に著しい。第一章の震災ルポルタージュにおいて一連の出来事が語られる際、「私達」ではなく「人々」という三人称代名詞が使われていたことを想起してみれば、その対比は興味深い。つまり、〈外／内〉という図式は、単なる対立構造ではない。ひとまず「人々」に焦点を当てて〈外〉を語ることを通して、それに対比される〈内〉の「私達」を語ることが可能になったわけである。それによって〈内〉なる領分が画定されていく。その意味で、このテキストの叙述構造は、〈外／内〉であると同時に、〈外〉から〈内〉へ、とも捉えられるといえる。当然、このような構造の語りを可能にし、またそれが収斂されるところは、自身徐々に恢復しつつある病躯の身でありながらも〈家族〉を見守る父親としての責務をも背負っている「私」の内面である。小説終局部の「私」の〈再生〉への希望が単に東京という都会の復興だけに向けられているのではないという解釈は、このような叙述構造から帰納されてくる。

四、〈手紙〉が向かう先はどこなのか

これまで考察してきたように『手紙』は各章がそれぞれ独立性を保持していながらも、全体で一つのテキストとして読まれるように構成されている。それを可能にしたのは記述の再配置や削除によるテキストの再構築であった。そうしたテキストの再構築は計算された綿密な構成の産物であり、ある向日性の下で統一的に編み出されているようにみえる。では、そのテキストはどこに向かっているのか。

『手紙』の世界を一言で言い表すならば、〈父性の文学〉という呼び名がひとまず無難な言葉選びかもしれない。なぜならば、これまで論述したごとく、テキスト全体をとおして最も前景化されているのは、実は〈父親〉自身という読みが可能だったからである。ただし、震災後の様々な文章群で〈家族〉の話題が取り上げられる際にクローズアップされるのは、〈父親〉ではなく主に〈母親〉であることは既に述べた。その意味で島崎藤村の『手紙』は同時代的に特異なテキストといえる。だが、『手紙』をそのようなテキストとして認めることはあくまでも〈父性の文学〉という前提が間違っていないときに限る。

ここで、『手紙』は本当に〈父性の文学〉であるのかどうか、仮にそうだといえるならば、その規定は何を意味するのかを確認する必要性が台頭してくる。その検証のため、一つの比較対象を設けたい。比較の対象として据える文章は、「子供達に見せるために」と副題がついている平塚らいてうの「震災雑記」である。[12] その副題からみても藤村の『手紙』と類似した性格の文章であることが窺える。

「お宅は皆さま御揃ひでほんとに御安心ですね」と私共はみんなから羨しがられました。お母さまも全くお父さまのお出かけになつてゐる時や、お姉ちやまの学校へ行つてゐ

る時でなくてほんとに仕合せだつたと思ひました。坊や達も（中略）坊や達ふたりの大事な大事なお友達のさんちやんのことを大変案じてましたね。

「ね、お母ちやま、どうしてるかしら」つて何べん言つたか知れません。[13]

子供を読み手として想定し話しかけるような〈語り〉の共通点からいって、「震災雑記」は、らいてう版『子に送る手紙』ともいえる。震災に遭遇した子供たちを気遣う親としての心境が両方の文章からは共通してみてとれる。ただし、二つの文章の間には明らかな違いが存在する。その差異は、一方が母親で一方は父親という表面的な語り手の差異のレベルにけっしてとどまらない。まず、指摘できるのは、想定された一次的な読み手の違いである。つまり、「震災雑記」は、そのメッセージが語り手と震災体験を共にした子供たちに向けられているのに対して、『手紙』は、家族から離れている震災未体験の長男宛の文章という体裁をとっている。前者では眼の前の子供に話しかけるような親近感溢れる語りが施されていることに対して、後者に前者ほどの一体感が感じられないのはそのためであろう。もちろん、その差異は、一方が少年期で一方は青年期にあるという子供たちの年齢の格差とも無関係ではないはずである。[14]

だが、より顕著な差異は別のところにある。前述したように『手紙』から明らかにみてとれるのは、震災後の混沌した世の中、すなわち〈外〉の世界と家の中の〈内〉世界との明らかな隔絶感である。それは〈社会〉に対する〈家族〉という構造ともいいかえられる。それに比べて、「震災雑記」においてはそのような〈外／内〉という対峙構造は見当たらない。換言すれば、荒れ果てた〈外部世界〉を語るという方法をとおして対比的に家族という〈内部世界〉の結束が描かれてはいない。〈家族〉は、震災を大きな契機としてあらためて結束するのではなく、むしろ、震災前から出来上がっていた結束感によって震災という災難が乗り越えられる、といったほうが妥当であろう。つまり、二つの文章において最も対比されることは、〈外〉の世界に対して〈内〉の世界を対比させる構造が内包されているかどうかである。

『手紙』を〈父性の文学〉と呼んだのはまさしくそのような文脈においてである。けっして子供に向ける父親の語りという意味としてではない。〈外／内〉という関係性の認識の上で〈家族〉の連帯感を再構築し、それによって〈家〉の境界を画定していくその〈弁別感覚〉こそが、いわゆる〈父性〉的なものといえよう。父子家庭の父親として母親の空白を封印することに汲々としているかにもみえた、藤村のそれまでの〈母性代行〉の文学とは明らかに質の異なる感覚が『手紙』からは認められる。[15]

その〈母性代行〉から〈父性の顕示〉というひそやかな転移は、かつて『青鞜』期において〈結婚〉や〈母性〉を排撃する〈女権論〉の主唱者であった平塚らいてうが、この時点で自ら〈母性〉を体現し、なおかつ典型的な〈母性〉の文学を作り上げているという思想的変貌とコントラストしつつ、また重なってもいる。つまり、それぞれ〈母性〉と〈父性〉に分かれるそ

の変貌の結果こそ対比されるようにみえても、〈親〉としての役目に徹するようになったという意味で、その変貌の方向性は重なっているのである。その意味で、『手紙』を〈父性的文学〉と呼べるのであれば、その位置づけは、一方に対峙しつつも相互置換的でもある、いわゆる〈母性的文学〉の存在と双方向の関係性の前提の上で成り立っているのである。

したがって、『手紙』というテキストが〈父性的〉性格を有しているという把握自体が重要ではない。肝心なのは、それが何に隣接または対峙しているかという関係性の問題である。その分析によって、このテキストが何を指向しているのかが導き出されると思うからである。

①大正七年あたりから、大震災の前後へかけて私達の送つた月日は実に多事であつた。社会的に言つて問題の多かつたのも過ぐる六七年の間であつた。

②大震災が来た。反動の大勢は果してその後に押寄せて来た。（中略）もし今日に狭い頑な保守的思想が生れて来て居るとするなら、その責は誰が負ふのだらう。私達の時代の難しさ。[16]

引用した①と②は、大正一四年一月に書かれた藤村の『大正一四年を迎へし時』からの一部分である。そのなかには「多事」であった「過ぐる六七年」への感想として、「反動」で「狭い頑な保守的思想」に覆われている時勢への懸念が述べられている。しかし、ここでは「保守的」時勢に向ける藤村の批判的姿勢そのものよりも、そのような藤村の時代意識の時間軸として「大震災」が据えられているという事実を重視したい。〈大震災〉という出来事自体が時代を変えさせたのではない、それ以前から蓄積されてきた様々な問題が〈大震災〉を契機として爆発するかのように露呈されたというのがこの文章から窺える藤村の認識である。その意味で、藤村において〈大震災〉とは、前の時代の延長線上に位置すると同時に時代の分岐点でもある。このような認識、つまり〈大震災〉を重要な転換のポイントとして捉える認識はそのまま『手紙』に投影されているといってもよい。

さらに、藤村の時代認識を彼の私生活の事情と考え合わせるならば、引用①の「大正七年」という年代の記述が内包する意味は重層的である。社会的にいえば、「大正七年」は米騒動などの重要な出来事が起こった年であり、引用の文章においてもその年が挙げられるのは表面的にはそのような意味においてである。だが、「社会的に言つて問題の多かつたのも」と社会的問題の他にも何か別の問題の存在を仄めかしている記述があるように、「大正七年」が藤村の私生活の側面からしても、重要な意味を持つ年であったことは周知の通りである。つまり、いわゆる〈新生事件〉を触発させた長篇小説『新生』の新聞連載が始まり、その後の慌ただしいスキャンダラスな騒動の起点となるのが大正七年だったのである。したがって、引用の文章①、②にみられる大正七年を起点とし〈大震災〉をその転換点として位置づける藤村の社会認識の背景には、密かに彼の〈私生活〉の問題も重ね合わせられているとみてよかろう。そして、

その両方の問題が〈大震災〉という出来事を媒介にして、一つのテキストのなかに収斂された形が、他でもなく『手紙』だったのである。〈大震災〉と〈私生活〉、その両方の事態に共有された思いがまさに〈再生〉への指向であったことはいうまでもあるまい。

むすびに――〈エッセー〉から〈小説〉へ――

『手紙』が最初に所収された『藤村パンフレット』第二輯は小説とエッセーが混在して編集されている。したがって、この時点では藤村が『手紙』を小説とエッセーのどちらのほうに位置づけようとしたのかを結論づけることはできない。しかし、後に短篇小説集『嵐』に『手紙』が所収される時点での藤村のジャンルづけへの意識は明らかである。なぜならば、『嵐』は〈短篇小説集〉として命名された上に、そこに所収された『手紙』以外の作品は『嵐』『分配』『ある女の生涯』など明確に〈小説〉として認知されているテキストが全部を占めているからである。つまり、最終的に『手紙』は他でもなく作家の藤村自らによって〈小説〉として位置づけられたのである。

しかし、それにもかかわらず、『手紙』は未だに〈小説〉として確実に評価されているとは言い難い。それだけではなく、作品としての評価も後に出た中篇小説『嵐』のほうに回収され、独立した評価は皆無である。『嵐』との内容的類似がその評価欠如の理由の一つとして挙げられるが、最大の要因は、『嵐』に比べて〈文学性〉ないし〈作品性〉の懸け離れすぎた格差があると評価されたことであった。ところが、藤村にとってみれば『手紙』は単に『嵐』を予兆するものではなく、彼が試みた最初の『嵐』であったといえる。本論で論述した『手紙』というテキストの複雑な再構築過程、またその過程を支えつつ、あくまでも『手紙』を〈エッセー〉から〈小説〉へと導こうとした藤村の強引な意思がなによりもその証拠である。

その意思に牽引された『手紙』から見出されることは、それ以前の藤村の作品『新生』や童話とは異質の父親像である。〈母性代行の文学〉から〈父性の文学〉へとして、ひとまずその変貌を整理することもできよう。というより、そのような図式の構築こそ藤村がこのテキストに託した思いであったと思われる。しかし、その際の〈父性の文学〉とは『嵐』と同レベルのものではあっても、けっして『夜明け前』までも同様の尺度で入れて論じられる性格のものではない。したがって、『手紙』の新たな座標設定をとおして浮上してくる、より根本的な問題系は、一概に〈父性の文学〉として自明のように評価されてきた藤村文学全体の意味づけに対する問い直しの必要性であるか、そうでなければ、〈父性の文学〉という問題設定そのものの可否であるといえよう。

【注】

本文で取り上げた藤村の文章は、『藤村全集』（筑摩書房、昭和四二年六月）による。なお、本文のすべての引用において旧字体の漢字は新字体に改め、ルビは適宜省略した。

（1）瀬沼茂樹『評伝　島崎藤村』（実業之日本社、昭和三四年七月）、二六三頁。

(2)『藤村パンフレット』は、藤村の短かい小説や感想文を収めた作品集で、全三冊である。第一輯は大正一三年一月、第二輯は同年六月、第三輯は大正一四年六月に出されている。『子に送る手紙』が所収されたのは第二輯である。

(3)『飯倉だより』は、そもそも大正一一年九月五日にアルスから刊行された藤村の感想集の題目である。大正八年一月発表の「三人の訪問者」(『開拓者』)から大正一一年七月発表の「孫の愛」(『婦人之友』)までの文章を収めた藤村の第三感想集が『飯倉だより』で、その内容はエッセーじみた文章が主である。また、ここに所収されたものには『子に送る手紙』の第一章と同じく、初出のときは「飯倉だより」と表題され、それに別の副題が付けられている文章も多数ある。

(4)この第一章の部分については、拙稿「関東大震災と〈震災小説〉—震災後の報道環境と島崎藤村『子に送る手紙』を中心に」(『文学研究論集』第二〇号、平成一四年三月)で論じたことがある。

(5)特に〈震災雑記〉〈震災雑感〉や〈震災日誌〉といった題で書かれた文章群のなかで、ジャンル分けし難いものが多い。たとえば、平塚らいてう「震災雑記—後日子供達に見せるために—」(『女性改造』大正一二年一〇月)などがその例として挙げられる。現在の時点でひとまず〈震災小説〉として分類できる作品群については、浦西和彦『関東大震災と文学』(『国文学　解釈と教材の研究』第三四巻第四号、昭和六四年三月)に詳しい。

(6)『カメラ』は、大正一〇年四月、アルスから創刊された月刊の写真雑誌である。佐伯恪五郎ら編『写真雑誌の軌跡』(JCIIライブラリー、平成一三年六月)によると、『カメラ』は、趣味写真をアマチュアに普及させる目的で創刊され、三宅克己を顧問に、『写真の趣味』(小西本店)で編集を担当していた高桑勝雄を主筆として迎えたとされる。口絵十コンテスト十メカニズム記事という、現在のカメラ雑誌の基本スタイルを確立した雑誌として評価される。そして、『カメラ』は関東大震災にも休刊せず、震災翌月の一〇月には〈大震災写真号〉を出している。その号の記事に藤村の「楠雄に」が載せられているが、その他にも、大震災について語った芥川龍之介、北原白秋、宇野浩二、戸川秋骨らの記事が掲載されている点が注目に値する。なぜならば、そもそも『カメラ』には写真関連以外の記事が掲載されることがほとんどなく、一〇月号のような記事編成は非常に異例のものだったからである。それは〈編集後記〉にあたる一〇月号の「編輯の前後」に「本号は震火災記念特別号で、写真記事は全然除外したが、十一月号からは内容概観とも旧態に復し、一層内容の充実を計ることになつてゐる」と述べられていることからも確認できる。

(7)瀬沼、前掲書、二六四頁。

(8)震災後の〈朝鮮人虐殺事件〉及び戒厳令下における言論統制の報道環境と〈新聞連載物〉としての『子に送る手紙』の関連性については、前掲論文「関東大震災と〈震災小説〉—震災後の報道環境と島崎藤村『子に送る手紙』を中心に—」で詳述したことがあるので参照されたい。

(9)大震災直後、震災という危機的状況のなかで自分の身を投げ捨ててまで子供を守るという母親の逸話が美談として〈新聞記事〉になることがしばしばあった。犠牲的愛の典型として〈母性愛〉が語られたのである。「瀕死の四日間子を守る」(『読売新聞』大正一二年一一月一一日)、「母性愛で九死に一生を得た幼女の身元判明」(『読売新聞』大正一二年一一月一七日)などの見出しの記事がその例として挙げられる。こうした〈母性愛〉の記述は〈震災小説〉にもみられるが、たとえば、小川未明『計らざる事』(『改造』大正一二年一一月)がその一例として挙げられる。

(10)島崎藤村「子に送る手紙」(『新潮』第四〇巻第一号、大正一三年一月)、九頁。

(11)島崎藤村「飯倉だより(子に送る手紙)」(『東京朝日新聞』大正一二年一〇月二二日)連載一〇回目。

(12)平塚らいてう「震災雑記」は『女性改造』に二回(大正一二年一〇月、一一月)にわたって掲載されている。ただし、最初の掲載には、平塚明という名前で書かれ「後日子供達に見せるために」と副題が付いていることに対し、二回目には、名前は平塚明子に、副題は「子供達に見せるために」と変わっている。

(13) 平塚明子「震災雑記―子供達に見せるために―」(『女性改造』大正一二年一一月)、一一五～一一六頁。

(14) 藤村の長男楠雄は明治三八年、次男の鶏二は明治四〇年生まれである。つまり、関東大震災が起こった大正一二年の時点で、楠雄は一八歳、鶏二は一六歳ということになる。それに対して、らいてう家の場合では、長女の曙生が大正四年、長男の敦史が大正六年生まれであるので、大震災の時点でそれぞれ八歳、六歳ということになる。したがって、藤村とらいてう、両家の子供の間にはちょうど一〇歳の年齢的格差があることがわかる。

(15) 拙稿「藤村の童話における〈母性性〉―〈母性保護論争〉との交渉という発想法から―」(筑波大学近代文学研究会編『明治から大正へ』平成一三年一一月)を参照。

(16) 島崎藤村「大正十四年を迎へし時」(『東京朝日新聞』大正一四年一月二〇日、二一日)。

(イ　ジヒョン　筑波大学大学院博士課程
文芸・言語研究科　文学)